

メッセージアウトライン マタイの福音書6：16～18 「断食するときは」

主イエスは6章1節で「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」と言われた。その実例として2～4節までには「施し」について教えられ、5～15節までには「祈り」について教えられ、本日学ぶ16～18節では「断食」について教えられている。

私たちは律法の教えを外側だけ。形だけ守るパリサイ人たちのような偽善に陥らないために、信仰の歩みに気をつけなければならない。

[16]「あなたがたが断食をするときには、偽善者たちのように暗い顔をしてはいけません。彼らは断食をしていることが人に見えるように、顔をやつれさせるのです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです」

イエスはここで偽善者たちの断食と比較して正しい断食の在り方を語っておられる。「断食」と聞くと私たち普通の信仰者にはあまり関係がない感じがする。それゆえ私たちはまず「断食」とは何かという問題から入って行かなければならない。まず、食物が欠乏しているからやむなく断食をしなければならなかったということがあるであろう。これは単純に食糧の欠乏から来ていることである。次には食欲不振とか、病気を治すために食事を断つということもある。これは断食療法として知られている。しかし、これは聖書の言う断食ではない。

聖書は言う。→レビ記23:27「特にこの第七の月の十日は宥めの日であり、あなたがたのために聖なる会合を開く。あなたがたは自らを戒め、食物のささげ物を主に献げなければならない」

この「あなたがたは自らを戒め」という表現が断食つまり食物を断つことである。それゆえ旧約聖書の時代からイスラエルの民はモーセの律法のもとで一年に一度断食をすることが命じられていたのである。さらに進んでイスラエルの人々は何かの国家的な一大事に直面したときには、断食が布告されたことが書かれている。→Ⅱ歴代誌20:3 またペルシアの王妃となったエステルはユダヤ人である自分の民族が根絶やしにされようとしている危機に際して、王に召されないのに王のところに行く者は誰でも死刑に処せられるという法令があつたのに、王に助けを求めるために侍女たちとともに断食してから王のところに向かった。→エステル記4章 しかし、神の直接命じられた唯一の断食は先ほどのレビ記23:27にある年に一度だけである。次に新約聖書の時代に入るとパリサイ人は週に二度断食をしていたことが分かる。→ルカ18:12 これは神の命令ではないが彼らはそうしていた。つまり彼らは聖書以上に先走り、自分の義を立てることに励んでいたのである。彼らはこういう

余分の断食を規則に増し加えることによっていかに自分が自己鍛錬に熱心であるかということを人々に誇示していたのである。これはもう神に忠実に従うということから、自ら脱線し偽善の道を行くことであった。ではイエスはどうかであったか。イエスはこのマタイの福音書4章でその公生涯の始めに四十日間の断食をされた。→マタイ4:2

そして今日の箇所でもイエスは断食について教えられており、信仰者にとって断食は正当なものであることを認めておられる。

またイエスの弟子、使徒たちも断食を実行した。

アンティオキアの教会は断食して祈った後、初めてサウロ(パウロ)とバルナバを伝道の旅に送り出した。→使徒13:1-3 パウロとバルナバは開拓、設立した教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。→使徒14:23 ここから分かることは、なんらかの重大な事態に直面したり、大切な決断を要することに迫られた場合にはイエスの弟子たちはいつでも祈りとともに断食をしたということである。

そして現代にいたる教会の歴史を調べてみる時に、あらゆる時代、あらゆる国のクリスチャンがその折々に断食をしていたということが分かってくる。神の民は、断食は正当であるだけでなく、何らかの事情のもとでは非常な重要性を持っていることを体験しているのである。

以上のようなことから考える時、聖書的な断食とは非常に重大な出来事に直面し、決断しなければならない時、また悲しみ、苦しみ、自分の罪を憂い神に助けと赦しを熱心に祈る時、教会の将来、また自分個人のことにに関して力強い神の導きを仰ぐ時、それらの目的のためにあえて食物をとらないということであることが分かる。

それゆえ、イエスが祈りに関することをこの断食についての前の部分に持って来られたのは適切な配慮であったことが分かる。

次に断食をするときの態度、取り組み方を考えたい。断食についての誤った態度がいくつかある。すなわち機械的なやり方での断食、あるいは単に断食のための断食は聖書の教えていることではない。断食は聖書にも書かれているように信仰生活の一部なのだから、クリスチャンになったからには一年のうちのこれこれの日に断食をしなければならないというならば、それはすでに断食本来の態度からそれてしまっているのである。断食や祈りは自分の信仰生活の特定の部分を埋めるための行事ではない。またもう一つの誤った態度は、それをインスタントに結果を求める手段としてしまうことである。つまり断食をすれば目的のものを得られるという考えである。私たちはこれをしているからあれを得られると言い始めた途端、神からの祝福を支配していることになる。それは神の主権性の重大な侵害となってしまう。

では断食するときはどのようにするべきなのか。それは何かの霊的理由によってそうするように迫られ導かれていると感じる場合にのみ行うべきであろう。何か大き

な靈的目的に没頭しようとする場合に規則としてではなく、自分の全存在を神に集中させ、そのようにして神を礼拝する特別な必要があると感じるからこそ断食をするのである。

本日の箇所16~17節ではやつれた顔つきで顔も洗わず、頭に油も塗らず、今で言えば髪に櫛も通さず、見苦しい身なり、つらそうな表情で断食をしている人物が登場している。このような人をイエスは偽善者と言われた。人々はこのように人を見ると「あの人は断食の期間を守っている。立派な人だ。あの苦しそうな表情、まさに尊敬に値する人だ」という評価をしてしまいがちである。このようなスタンドプレイはパリサイ人たちの得意とするところであった。イエスはこのような態度を厳しく責め、彼らはすでに自分の報いを受けていると言われる。

[17-18]「断食をするときは頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは、断食していることが、人にではなく、隠れたところにおられるあなたの父に見えるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が報いてくださいます」

「頭に油を塗り、顔を洗う」これは普段と変わらず自然にふるまうということである。18節では「……そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が報いてくださいます」と言われている。

私たちの父なる神は私たちのふるまいをよくご存じである。人目に隠れているような行いでも、それに正しく報いてくださるのである。

私たちは施しをする時にも、祈る時にも、断食をする時にも、他の人にどのように思われるか、評価されるかという思いではなく、ただ神にのみ目を向けて神の栄光が現わされるように行う者となっていきたい。